



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナイチンゲールの看護の本質はどのように伝えられたか
Author(s)	吾妻, 知美
Citation	教授学の探究, 23, 111-121
Issue Date	2006-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/13664
Type	departmental bulletin paper
File Information	23_p111-121.pdf



ナイチンゲールの看護の本質はどのように伝えられたか

吾 妻 知 美

(北海道大学大学院教育学研究科博士課程)

(天使大学看護栄養学部看護学科)

目 次

- 0 はじめに
- 1 ナイチンゲールの看護と教育
 - 1-1 ナイチンゲールの看護の根源
 - 1-2 ナイチンゲール看護教育
- 2 わが国におけるナイチンゲール方式による看護教育
 - 2-1 有志共立東京病院看護婦教育所
 - 2-2 京都看病婦学校
 - 2-3 桜井女学校付属看護婦養成所
- 3 保健師助産師看護師法制定前（第二次世界大戦前）の看護教育
 - 3-1 聖路加看護婦学校
 - 3-2 日本赤十字看護婦養成所
- 4 おわりに

0 はじめに

看護とは、体内で自然の回復過程が順調に進むように生活過程を整えることによって、その生命力に力を貸すことだとナイチンゲールは説いた。この生命力に力を貸すということは、人間が営む生活そのものに焦点を当てて、その生活がその人の生命力を消耗させないように整えていく援助活動であり、ここに看護独自の機能が存在する。ナイチンゲールが発見し形作ったこの看護の本質ともいえる近代看護の原点は、ナイチンゲールの教育を直接受けた看護者や書物によって世界中に広がった。そして、その原点は、看護が発展的変容を遂げた現代にあっても色あせることなく、看護を志す者の道標として脈々と受け継がれている。

わが国において近代看護婦教育が開始されたのは、1885年（明治18年）、高木兼寛によって創立された「有志共立東京病院看護婦教育所（現在の東京慈恵会医科大学の前身）」、新島襄による「京都看病婦学校」、米国人宣教師ツルー（Maria True）による「桜井女学校付属看護婦養成所」で、ナイチンゲール方式、いわゆるトレンド・ナース（Trained Nurse）の看護婦養成が欧米先進国から直輸入の形で開始された。このことが、看護の組織的、系統的な教育による看護の質の向上、そして看護婦が自立するきっかけへとつながっていくはずであった。しかし、この当時、看護専門職を目指す看護教育はあくまでも傍流に終わってしまった。帝国大病院（東京大学医学部付属病院の前身）による医学からの要請に基づく看護婦養成や、日本赤十字社による戦時救援看護婦養成が主流となり、全国の看護婦養成所の模範となって全国に広

まったからである。これらの養成所では、看護婦の役割が医師の助手としての域を超えることはなかった。この時代は、第二次世界大戦が終結し、連合軍総司令部 (GHQ) の指導のもとに保健婦助産婦看護婦法、保健婦助産婦看護婦養成所指定規則が制定され、看護の身分の確立と新しい看護教育が始まるまで続いた。

この新しい時代の到来から半世紀以上を経た現在、看護を学問として成立させるため、積極的に自然科学の手法を取り入れ、看護現象のある一部を深く掘り下げて看護を説明する看護理論が数多く構築されてきた。これらの看護理論や研究方法は、ある種の看護研究や理論の検証といった領域には有効なことであるが、一つの理論ですべての看護現象を説明したり、看護全体を捉えることはできないという限界がみられる。さらに、作り出された理論は醸成されることなく科学や医療技術、他の関連分野の動向に合わせたサイクルで作り変えていくことが必要になってくる。そして、わが国の看護は、日本独自の伝統や文化の上に構築されたものではなく、これら欧米諸国の方法論を常に模倣し追従し発展してきたのである。

さらに、看護教育に目を向けてみると、看護の新しい知識と技術の伝達が教育の中心となり、看護の本質を基盤にした看護独自の機能を遂行するために「何を教えるのか」という根本を問わないまま進んできた結果、その方向性を見失っている状況にあるといっても過言ではない。看護教育において、何を教え、そしてどのような方法で教えるのかということは、いつも看護の本質に立ち戻って考えていかなければならないことであるが、その本質はもはや形骸化し議論に上ることもなくなっている。金井は「ナイチンゲールは“人間にとって看護とは何か”を解くことによって、時代や国民に縛られない、本来のあるべき看護のすがた(本質・原点)を示している」¹⁾と述べている。筆者もこの考えに強く共感する。ナイチンゲールの看護における人間観や看護観(看護の本質)は、わが国独自の文化に根ざした看護を構築するため、看護教育を行うための鍵になるはずである。

そこで、本稿ではナイチンゲール看護の本質が意図したものと、その看護をわが国に浸透しようとした先人の思いと看護教育への影響を振り返り、今後の看護教育の手がかりを考察するものである。

1 ナイチンゲールの看護と教育

1-1 ナイチンゲールの看護の根源

近代看護の創始者であるナイチンゲールは、当時、女中の仕事と同程度にしか捉えられていなかった看護を、医学と対等の立場にあり、両者は車の両輪関係にあると主張し、そのための知識体系の確立と専門職業としての自立を試みた。そして、看護は「健康を回復し、また保持し、病気や傷を予防し、またそれを癒そうとする自然(nature)の働きに対して、できる限り、(それを受け入れる)条件の満たされる最良の状態に私たち人間をおくことである」²⁾と医師とは違う独自性を示す定義を与えた。さらに、看護は単なる職業訓練ではなく、それを実際的にかつ科学的な、系統だった訓練を必要とする芸術(art)であることを宣言した。これが看護専門職としての出発点となった。

ナイチンゲールは生涯 150 あまりの著作があり、そのほとんどが衛生および保健に関する著作である。その中でも 1860 年に出版された『看護覚え書』は、女性たちに向けて書かれた本であり、家庭を健康に保つための書物であった。『看護覚え書』では、看護独自の内容を「新鮮な

空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、また食事内容を適切に選択し適切に与えること—こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするよう整えること³⁾であると具体的に優しいことばで示している。そのため『看護覚え書』は、現代でも看護婦のための必読書となっている。

池川は⁴⁾、ナイチンゲールの示した具体的看護の内容は古代ギリシアにおけるディアイタ (diaita) の健康訓に由来していると述べている。ディアイタとは、人間の本性(自然)を普遍的自然—つまり宇宙—のひとつの似姿でとらえ、人間の生き方(栄養の摂取、環境との関係、労働、性生活、政治的、社会的生活など)を自然に習って整えることである。また、小玉は⁵⁾、この考えを発見した直接の場は、人間ではないといわれた兵士たちが、ナイチンゲールの看護により見る見る変わっていったクリミア戦争であると指摘する。このような人間にそなわった自然治癒力に対する基本的信頼とその技術こそ看護の原点であった。

ナイチンゲールは『病人の看護と健康を守る看護』(1893)の冒頭において「新しい芸術であり新しい科学であるものが、最近40年の間に創造されてきた。そしてそれとともに新しい専門職業と呼ばれるもの—われわれは天職(calling)と呼んでいるのであるが—生まれてきた。(中略)そしてその芸術とは、病人を看護する芸術である。病気の看護ではなく、病人の看護というところに注意してほしい。われわれはこの芸術を本来の看護(nursing proper)と呼ぼう(中略)さらにその芸術は、世界中のどの家庭にも関わりがあり、また家庭から発し、家庭の中でのみ教えることができるものである⁶⁾と、看護が人間の生活に根ざしたものであると強調した。そして、看護婦には、「病気の法則、病気の原因、病気の徴候、また病気の徴候ではなくてたぶん看護の良し悪しによる徴候などを認識すべきであると同様に、生命の法則と健康の法則とを認識しなければならない⁷⁾と、看護実践の根拠とその実践を評価する能力をも強く求めたのである。

1-2 ナイチンゲールの看護教育

クリミア戦争の功績により多額の基金を得たナイチンゲールは、1860年、聖トマス病院看護婦学校を設立した。それは史上最初の、組織的であるとともに宗教の影響のない、独自の看護教育であった。ナイチンゲールは、科学的に系統だった訓練のために、(a)看護婦は、《訓練という目的のために組織準備された》病院で技術的に訓練を受けるべきであること、(b)「看護婦は人間のかつ規則的生活をするのに適した“ホーム”で暮らすべき、という2点を原則とした⁸⁾。この厳格な教育においても、看護学生は職業教育にありがちな労働者として扱われることはなかった。ナイチンゲールは看護を「実際的にかつ科学的な、系統だった訓練を必要とする芸術」と述べていたように、聖トマス病院看護婦学校における教育は、徒弟制度ではなく系統的に学ぶことの訓練を徹底的に行なった。病棟実習では、看護教師に対しては、毎日の病棟のシスターや病棟看護婦からの学び、特殊な症例などの観察記録の提出があった。そのほか、医学教師には「体温」「脈拍」「睡眠」「栄養」「尿」「便」などの主題にもとづいた24時間の観察記録と「治療」を詳しく書いた、症例報告の提出が義務づけられていた。この記録でとくに求められたのは症状の「因果関係」と、看護の中で何をなすべきかとそれをどう実践するか、行なわれたことが《なぜ》なされたのか、《なぜ》他のことではなかったのかという根拠であった⁹⁾。以下に『看護婦の訓練と病人の看護』の中から、ナイチンゲールが意図した科学的な訓練の意図について以下に引用する。

訓練とは、生と死、健康と病気といった途方もなく大きな事実直面して、正確に観察し、理解し、正確に知り、実施し、正確に報告するという自らの仕事を自覚するように教えることである。訓練を受けることによって看護婦は、医師の指示や権威に対して卑屈に従うのではなく、忠実であるべきことを学ぶ。指示に対する真の忠実とは、自主的で熱意ある責任感なしには存在しえないものであって、このことだけが本当の信頼感を保証するのである。訓練を受けることによって看護婦は、健康や生命を回復する働きに対し、自分たちが判断できる範囲内で打つ手を学ぶ。厳密にいうならば、内科医や外科医の能力や知識に理性的に従うことを学ぶ。また健康のメカニズムの歯車が、医師の指示されたとおりの噛み合うようにする方法を学ぶ。訓練を受けることによって看護婦は、生命に及ぼす看護の効果を、ケアの有無の事実とか、罹患率とか、罹病期間とか死亡率などとしてかなり正確に確かめられるに違いない。(94-95)

このように、ナイチンゲールは看護を単に医師の助手として要求される仕事以上のことを求めていた。看護は、医学という学問の担う実践的な学問と位置づけ、そのための科学的認識を「訓練」する方法を示した。「訓練を受けることによってのはじめて、看護婦は自分の見ているもの一事実一を真に見、言いつけられたことを行うことができるようになる。それも単に経験の法則によってだけでなく、彼女の考えの中で彼女の考えの中で彼女を導いていく思考や観察の法則にしたがって行動することができるようになる」¹⁰⁾と述べている。そして、この教育は、内科医や外科医の科学的指導のもとに行なわれることを求めた。

このような、ナイチンゲールの説いている科学的な訓練を紐解いてみると、そこに古代ギリシャ以来の伝統的な自然観に類似を見出すことができる。このような自然観における自然界の個々の知識や概念は、それぞれ独自の意味を持ちながらも互いに強く関連しあって自然認識の総体を形作り、しかも、それが単に知識としてではなく技術とも連続的につながった、並列ではなく、階層的体系的に捉えるという自然観で、基本的には現象の背後に本質を求める認識態度である。現象のよってたつところを奥へ奥へと追い込めて行く認識構造で、その結果、個々の階層での知識がそれぞれ固有の意義を持ちながら、閉じた体系とはなっていない、互いに重層的に絡みあった知識構造を作りあげているという考え方である¹¹⁾。

たとえば、肺炎に罹患した患者の看護実践を考えると仮定する。まず重要になってくるのは看護婦の五感を使った観察力による現象（異常）の発見であろう。この発見から出発し、肺炎から起こる苦痛を緩和するのが看護技術である。それには、環境を整えたり、発熱から来る苦痛を緩和し、清潔を保ち、食事を与えるなど体力の消耗を防ぐ援助を効果的に行うための、基本的な人間の身体の仕組みである解剖学や生理学の知識が必要になってくる。それだけではなく、その症状が起こる原因や、肺炎の原因である細菌学や免疫学の知識が必要になってくる。また、患者の症状を聞くためのコミュニケーション技術も必要になってくる。このように、看護婦の五感による観察によって現れている現象から出発し生命力の消耗を最小にするための看護を探していくという認識の方法である。したがって、ナイチンゲールは内科医や外科医に医学を教授されることを科学といているのではなく、看護に結びつけるための道筋を医学に求め、それらの知識を総合して、必要な看護実践を考えていく認識の育成を試みていたのではないだろうか。さらに、その訓練は規律なしには到達し得ないと強調している。以下に《規律》について引用する¹²⁾。

さて《規律》こそ訓練の本質である。規律といえば人々は演習や気をつけの姿勢で立つこと一ある人は子供を鞭打つことを連想するかもしれない。しかし次の言葉に耳を傾けてほしい。おそらく他の誰よりも訓練

において豊富な経験をもっているある貴婦人の言葉である。「それ〔規律〕は教育であり、指示であり、訓練なのです。それは実際わたしたちの道徳的・身体的そして精神的な能力を一この世の生のためだけでなく、未来の、より高い生のためにこの世を訓練の場と見ながら一行きつくところまで展開させていくものなのです。しかも規律は秩序と方法とをうちにもっていますし、また自然の法則（「神の法則」）を知れば知るほど、私たちは秩序や方法やあらゆるもののためふさわしい場所やその働きがよくわかってくるばかりでなく、それらのあり方が材料の点でも場所の点でも全く無駄がないことを発見します。（95-96）

そして、ナイチンゲールの看護教育の2つ目の原則であるホームでは、学生の道德面や精神面を生活の中で優れた指導者を模範として教育した。看護教育では科学的な知識の他に、このホームでの《規則》による基本的な生活と人格の形成が重要であることを示した。

ナイチンゲールの看護婦学校は、入学生の条件により、特別予科生と普通予科生に分けられていた。特別予科生は上流夫人たちの中から選ばれ、生徒としての1年間の見習い期間の後に、病棟での実務見習い実習2年を経た後さらに、看護婦の監督者としての教育をほどこした¹³⁾。その卒業生たちは、トレンド・ナース (Trained Nurse) と呼ばれ、看護の質と社会の評価を変えるため英国のみならず、諸国に散らばっていった。

2 わが国におけるナイチンゲール方式による看護教育

幕末から明治初年にかけてできた病院には、多数の看護婦が働いていたが、それは正規の看護教育を受けた人たちではなかった。この当時、病人の世話を家族以外の他人にゆだねること自体同族の恥辱であるといった考え方が一般的であったため、看護が職業として独立して存在するとも考えられてはいなかった。また、当時のわが国には、公的な女子教育機関はもちろん、社会的通念としては、女子が教育を受けることは及びもつかない時代であった¹⁴⁾。

このような時代背景のもと、わが国におけるナイチンゲール方式による看護婦養成の開始は、1885年（明治18年）、聖トマス病院留学から帰った医師、高木兼寛によって創立された有志共立東京病院（現在の東京慈恵会医科大学病院）養成所が最初である。次いで米国に留学し京都同志社を設立した新島襄による京都看病婦学校、米国人宣教師ツルーによる桜井女学校付属看護婦養成所などが設立され、わが国の近代看護が欧米先進国からの直輸入の形で開始された。

2-1 有志共立東京病院看護婦教育所

有志共立東京病院での看護婦の育成は、当時の華族、大官、富豪など、近代医学の恩恵を受けた特権層の家族看護の要求と結びついて生まれた。創立者である高木兼寛は、聖トマス病院看護婦学校の教育をつぶさに視察した結果を取り入れた看護教育を行なったといわれている。例えば、生徒たちが実習した病室も、聖トマス病院と同じ構造であり、教育所の組織、学習環境、実習方法、評価方法もきわめて類似していたといわれている¹⁵⁾。

高木は、米国でナイチンゲール方式の看護教育を受けた宣教看護婦のリード (Reade) を招聘した。教育が開始された当初、高木が英語で講義を行い、看護法の実際はリードが行ったとされている。また、高木は、留学から看護教育に関するいくつかの教科書を持ち帰っており、これらを参考に看護法の教科書を著したともいわれているが、その詳細は不明である。坪井¹⁶⁾は、ここで行なわれた教育内容に関しては、米国における最初の看護教科書の『ハンドブック・オ

ブ・ナーシング』(1878年)が用いられたのではないかと推測している。この教科書は、ナイチンゲールの『看護覚え書』と類似した点が多く見られているが、「専門職看護婦」のために書かれている分、内容は看護婦に必要な実用的で包括的な知識内容になっている。なお、リードは2年で帰国してしまうが、高木は看護婦生徒を聖トマス病院に留学させ優れた看護の教育者の養成をはかった。しかし、リードの帰国後、病院は皇后が総長となりキリスト教精神は衰え、看護婦教育も病院付属となり教育の独自性を失っていった。

1896年、看護婦による最初の著書、『看病の心得』が、同校7回生の平野藤により著された。『看病の心得』¹⁷⁾は、一般婦人の家庭看護や看護職の実務のためにわかりやすく著されている。看護を天職と紹介していること、その内容、構成に『看護覚え書き』との類似点を見出すことができる。このように、近代看護教育を受けた看護婦たちは、ナイチンゲール看護の精神を引き継ぎ、執筆活動を開始するなど従来看護婦とは際立った違いを現し始めた。この差異は教育や職業人としての自覚の差から生じたものと思われる。

2-2 京都看病婦学校

京都看病婦学校は、アメリカン・ボード・ミッションの援助を受ける同志社を背景に設立された。創立者は同志社社長新島襄と宣教医のJ. C. ベリーであった。この学校は、設立以前より、アメリカ人看護婦を教育担当者として準備し、教育開始から約9年間にわたって、数名のアメリカ人看護婦による指導を続けた。その1人であるリンド・リチャーズ(Linda Richard)は、アメリカの最初の看護婦となった人物である。さらに、実習のための病院も建設された。解剖生理学は米国のカトラーの日本語版を使って医師が教え、看護、マッサージ、栄養学はリチャーズが指導した。実習は臨床の場で行われたが、在宅患者の看護はリチャーズが毎日監督して実施していた¹⁸⁾。ここでは、当時あって最高の看護教育が実施されたといった評価もあるが、新島襄の死去、リチャーズの帰国に端を発して、同志社との絶縁、病院の閉鎖、学校の個人病院への移転などのより、実質は明治39年、156名の卒業生を送り出して終止符が打たれた¹⁹⁾。

2-3 桜井女学校付属看護婦養成所

1886年(明治19年)、米国人宣教師ツルーによって桜井女学校付属看護婦養成所が開校された。この教育内容の詳細は不明であるが、1年間の学科では、解剖、生理、看護法、英語など原書で行われたといわれている²⁰⁾。翌年、帝国大学医科大学における実習指導のため、ナイチンゲール看護学校出身のアグネス・ヴェツチ(Agnes Vetch)が招聘された。ヴェツチの滞在は1年間のみであったが、彼女は「看護法講義及看病術実地練習」を帝国大学で行なった。しかし、ヴェツチの滞在が短かく、帝国大学医科大学での看護婦養成開始時期と重なったこともあり、その後養成所は「赤坂病院分院衛生園」に移行し、1906年閉鎖した。その間20年間での卒業生は20名という少なさであった²¹⁾。

一期生6名は、それぞれ指導的役割を担って就職した。この1人である鈴木雅は、1890年(明治23年)慈善看護婦会を創立した。これはわが国における派出看護業の最初である。さらに1896年(明治29年)大関和とともに東京看護婦講習所を設立した。この講習所は多くの病院の付属看護婦養成所と異なり、派出や女性の教養としての看護学を中心に教育したとされる。東京看護婦会が看護婦養成に踏み切った理由は、日清戦争後、赤痢、コレラおよび急性伝染病が

流行し急激に看護婦の需要が高まり、質の低下が見られたことにある。彼女らのキリスト教による深い信仰が、看護を博愛と奉仕の上になつ崇高な近代的な職業とすることに駆り立てたのであった²²⁾。

また、大関和は後進の指導のため、派出看護婦の手引きとして大きな役割をはたした『派出看護婦心得』(1899年)、看護の心得について説明している『実地看護法』(1908年)を著した。『実地看護法』は、「第一編 看護法」「第二編 伝染病」,「第三編 普通内科病」「附録」から構成されており、当時の要求にこたえたもので、またたくまに数版を重ねるほど売れゆきがよかったようである。「第一編 看護法」「第四 病室位置及に準備」では「一病室は成るべく南東或いは南西に向ひ、完成明瞭なるところを良といたします。フローレンス・ナイチンゲール嬢曰く(看護に第一大切なるは新鮮なる空気なり、次に要用なるは光線なり、光線なくして病人を癒さんとせば、到底出来ざるべし)」²³⁾と、ナイチンゲールを引用しながら、日常生活援助の看護技術や観察の方法を紹介している。これらの著作はキリスト教的色彩の強い看護婦精神を高く掲げながら、派出看護婦という立場から、病人の生活の場に居合わせながら生活場面を整えていく技術を医学的知見を含めながら「病人の身体に直射日光はいけませんが、屏風や日覆をもって避ける」というようにわが国の実情に合わせ、実際的で懇切丁寧な説明を加えている。

また、ナイチンゲールの『看護覚え書』が『看護の槩』として和訳され出版されたのは1913年(大正2年)であることから、大関がわが国においていち早くナイチンゲールの教えを、わが国の看護の状況に合わせて工夫し紹介したことになる。ナイチンゲールは《地域》看護について「これは貧しい病人をその家庭で看護することで、ひとりの看護婦が十分ゆきとどく範囲内で、できうる限り多くの患者を受け持つものである。地域看護、つまり貧しい病人をその家庭で看護するということは看護の中でも最重要の分野で、最高の資格を要求される。というのは、病院看護婦の場合と異なり、彼女にとっては、必要時に常に内科医または外科医が呼べば答えるところに控えているわけでもなく、病院設備が即座に利用できるということもないからである」²⁴⁾と述べている。この指摘からすると、地域看護にこそ十分に教育された看護婦が必要である。そのためには、十分な看護教育を受けずに派出看護を行っていた看護婦の看護の質の向上に対する大関の著作の貢献は大きい。

ナイチンゲール方式の看護教育では、看護実習に重きがおかれ指導者自らが病院や地域に学生とともに向いて、実践的な指導を行なったところに特徴がある。また、桜井女学校と京都看病学校は、キリスト教に基づき看護婦の職業的自由、経済的、精神的独立目指したものであった。この二つの施設が挫折した原因は、キリスト教に対する圧迫や外国からの資金援助の打ち切り、社会的風潮としての国家主義的軍国主義の台頭が挙げられる。

一方、医学はドイツ方式が採用された。その結果、看護学が医学の亜流とみなされ、医師の看護婦への上下関係的な男女差別などが顕著になった。大正時代にはいると医療機関の病床数は急増に伴い看護婦の需要も急増した。看護婦養成は私立病院や開業医が自前で看護養成所を設立し、その数は146ヵ所(1925年)まで増加していた²⁵⁾。近代的看護教育を受けた第一世代の看護婦たちは、卒業後間もなく後進の指導にあっていた。しかし、看護婦養成所の急増にともない、教育者が不足であり、また、時間的、経済的な余裕もなかったことはこの時代背景から考えても無理のないことであった。そのため、大半の看護婦教育施設は医師が育成の主体となっていた²⁶⁾。さらに、情報網の整備もままならないなかで、ナイチンゲール精神が一般の看護婦に、全国津国浦々にまで浸透することは容易ではなかったことは想像に難くない。

3 保健師助産師看護師法制定前（第二次世界大戦前）の看護教育

1915 年（大正 4 年）に内務省が看護婦規則を発令し、看護婦資格取得は看護婦試験と指定看護婦学校卒業の 2 つの方法が定められた。指定校の要件としては、修業年限は 2 年以上であること、必修教授科目 6 教科と主要な教科は医師が教授することなどが定められた。指定校養成所は病院による養成が主流であり、教育内容はそれぞれの病院の経営方針や規模に左右されていた²⁷⁾。その中で、聖路加看護婦学校や日本赤十字社の看護学校が看護教育を新しい方向に導いた。

3-1 聖路加看護婦学校

聖路加看護婦学校は、宣教医トイスラー (Teusler) により開院した築地聖路加病院を母体に、1902 年（明治 35 年）に 2 年課程として正式な認可を受けずに開校した。一般的な看護婦養成施設は、経営主体の多くが病院となっており、病院の経営費の一部として学校運営が賄われる傾向にあったが、聖路加看護婦学校は、日本の看護婦のレベルアップを目的として設立されているため、精神的、実質的にはまったく独立しており、生徒から学費を徴収した。明治 36 年からはアメリカで 2 年間の病院研修を受けた荒木いよを中心に教育が行なわれた²⁸⁾。

1920 年（大正 5 年）に聖路加国際病院付属高等看護婦学校となり、女学校を卒業した人々を入学させて、アメリカ、あるいはカナダの看護婦学校のレベルの教育をはじめた。その教育は思考過程を重視したもので、服装や態度に対しても非常に厳格であったようである。学科は「看護歴史、ホスピタル・ハウスキーピング、生理学、食事法、化学、病理学、内科看護法、外科看護法、小児科、婦人科、眼科、皮膚科、一般看護法、看護学論理、個人衛生、解剖学、薬物・溶液、包帯学、細菌学、薬理学、伝染病看護法、患者の食餌療法、整形外科、産科学、耳鼻咽喉科、特殊治療法、公衆衛生の 27 科目」²⁹⁾あり、看護婦規則による教授必修科目が「人体ノ構造及主要器官ノ機能、看護方法、衛生および伝染病大意、消毒方法、包帯術及治療器械取扱法大意、救急処置」³⁰⁾の 6 科目であることを考えると、その内容もまた当時の一般的な看護教育機関に比して内容は大きく異なっており、かなり高度であったと推測される。寄宿生活に関しては前田が「寄宿生活は自由で楽しいものであった。ときどききたないとお目玉を頂戴することもあったが、嫌な思い出はない。生活指導なるものがあったのだろうか、自然のうちに行なわれていたものであろうか。指導を受けたという思いはない」と述べているように、それほど厳しいものではなかったと思われる。

このころのアメリカの教育内容は、1939 年、西尾幾治が著した『看護婦養成の実際』の看護教科書から推測することができる。この教科書は米国の看護婦養成の教育課程を紹介し、戦後わが国の看護教育制度成立の参考資料となったともいわれている³¹⁾。西尾によると、すでに欧州と米国で看護婦養成において、欧州では徒弟制式教育法が勢力を占めている関係上実習は主であり学科は補充的であるが、米国では学科に非常な重きを置いた大学教育であり、「看護婦の任務は単に患者を病床に看護するばかりでなく、疾病を予防することが之に劣らず重要なものになっている」³²⁾というように、看護教育の高等教育化や業務拡大がなされていることが示されている。この点において米国の看護教育はナイチンゲールの大事にした臨床における看護教育とは別の方向に向かっていったといえる。また、1920 年聖路加看護婦学校は、聖路加国際病院付属高等看護婦学校に、その後聖路加国際病院から独立し、1927 年聖路加女子学院に昇格した。わ

が国における看護系としてはじめての専門学校になるなど、高等教育へと邁進していくのである。

3-2 日本赤十字看護婦養成所

日本赤十字社は、1877年(明治10年)西南戦争の折に、佐野常民が博愛社を設立し男性看護人と医員による教護を行ったのが始まりである。さらに、1886年(明治19年)博愛社病院を開院し、1886年(明治20年)日本赤十字社病院と改称した。日本赤十字社は当初、皇室をはじめとした貴婦人層によびかけて、日本赤十字社篤志看護婦人会を結成し、救護活動に関する学習会を開始した。本格的な看護婦養成は1890年(明治23年)であった。日本赤十字社の看護教育は、日本陸軍の教育方針に通じ、上官の命に絶対服従する、克己、忍耐、奉仕が指導精神の柱であった³³⁾。

日赤は独自の精神教育を続け、看護婦の規範はドイツに求め続けていた。1912年(大正元年)にワシントンで行なわれた赤十字国際委員会は、最も功績のあった看護婦に対し、1年おきに「フローレンス・ナイチンゲール記章」の授与を行うことに決定し、日本の同賞の推薦権を日赤に置いた。そして、わが国で初の記章は日赤看護婦3名に与えられることとなった。そこで、日赤は救護看護婦に対し「即刻ナイチンゲールたれ」と目標を与えた。後に日赤は“ナイチンゲール精神”として博愛と奉仕の精神を標榜した³⁴⁾。

大正後期から昭和初期にかけて日本赤十字社の教育の特徴については、山本らが行なった卒業した20名の聞きとり調査から推測することができる。看護技術教育は、臨床に先立って教室における実習やデモンストレーションは殆ど行われることなく、臨床での実践によって訓練された。指導体制では婦長-卒業生-上級生-下級生というヒエラルキーがあり、上位の人には絶対的権威があった。看護行為の判断と実行には、すべて上位者の指示が必要であった。状況に応じて熟練した方法を他者に示すことはあっても、その根拠を他者に納得いく方法で教えることは少なかった。ただし、患者を大切にしたいや観察する眼とベッドサイドでの身体的直接働きかけが重視されていたことは、ナイチンゲールの思想に一致すると述べている³⁵⁾。しかし、ナイチンゲールが述べている看護(art and science)を実践するための、科学的な、系統だった訓練は行なわれていなかった。

その後、第二次世界大戦により、不十分な医療施設のもと、短期間での看護婦養成が行なわれるようになり、わが国の看護や医療の状況は戦前よりも劣悪なものになっていった。

4 おわりに

ナイチンゲールは、看護を病人に対して、科学的認識(science)と看護の知識によって、自然治癒力を高める状態を作り出す(art)ことである、と定義した。そして、看護を科学的認識を育成するための看護教育のシステムを構築した。この教育を受けた優秀な指導者となったトレンド・ナースたちは世界中に広まった。わが国にも、1885年ナイチンゲール方式の直輸入による看護教育が開始され、卒業生によりナイチンゲールの本質を、わが国の方法に改良した書籍の出版もみられた。しかし、一般の看護婦たちにはその本質は、結局伝わらなかったようである。戦前においては、女性の意識や社会そのものが看護を自立した職業として受け入れるには未成熟であった。

その後、米国では看護を学問とするための新しい科学を取り入れた理論構築が盛んになった。これは、他学問の成果を取り込み、看護現象を要素を取り出して分析することが特徴であるため、ナイチンゲールの思想とは全く土台を異にしているといっても過言ではない。新しい科学を取り入れた看護教育ではたくさんの知識を注入することが必要になってくるのである。わが国の看護教育は、この米国の方法に追随した形で進展してきており、現在の看護教育の混乱の要因にもなっていると思われる。

これからの看護学教育に求められているのは、社会の変化に対応しながら、高度な看護実践の実現に向けて活躍できる人材の育成である。この定義は昔も今も変わらないであろう。しかし現在求められている内容は、最新の医療機器やコンピュータ処理による検査技術、移植医療や遺伝子治療などの高度の最新医療への対応、進展する高齢化社会や QOL への対応など多様である。今後、この内容はさらに高度になっていくことが考えられる。そして、このなかで看護の役割を遂行する手段として看護技術が必要になってくる。田島らの行なった「看護基礎教育における看護技術および認知領域面の教育のあり方に関する検討」³⁷⁾では、看護基礎教育課程に必要な看護技術は 289 項目に設定されるということが報告されている。看護技術を細分化しているため、このような結果になってくるのであろう。しかし、この看護技術項目が完全に習得することにより現在問題となっている看護実践能力の低下の問題が解決できるとも考えられない。

看護の対象は、部分からは捉えられないし、看護実践は細切れの知識・技術のパッチワークによって成立するものではない。看護は科学ではない。もちろん技術だけでなく、この両者の統合があってはじめて成立するのである。ナイチンゲールはそのことをわれわれに示していたのである。ナイチンゲールの自然観、人間観、生活観、健康観、看護観などを理解し、看護の本質を正しく受け取めることにより、流転する社会情勢の中で、時代を越えても変わらない看護教育の方法論を見出すことができるのではないだろうか。

引用文献

- 1) 金井一薫：現代社白鳳選書 14 ナイチンゲール看護論・入門 “看護であるものとないもの” を見わける眼、現代社、1993, p5.
- 2) フロレンス・ナイチンゲール、田村真、薄井坦子、小玉香津子訳：看護婦の訓練と病人の看護、湯横ます監修、ナイチンゲール著作集II、1974, p 97.
- 3) フロレンス・ナイチンゲール、薄井坦子、小玉香津子訳：看護覚え書き 看護であること看護でないこと 改定第 6 版、現代社、2000, 14-15.
- 4) 池川清子：看護—生きられる世界の実践知—、ゆみる出版、1990, p 130.
- 5) 小玉香津子：人と思想 155 ナイチンゲール、清水書院、1999, 212-213.
- 6) フロレンス・ナイチンゲール、田村真、薄井坦子、小玉香津子訳：病人の看護と健康を守る看護、湯横ます監修、ナイチンゲール著作集II、1974, p 125-126.
- 7) 前掲書 6), p 126.
- 8) 前掲書 2), p 78 .
- 9) 前掲書 2), 81-83.
- 10) 前掲書 6), p 125.
- 11) 岡本正志：科学とは何か—「市民的教養の自然科学」における科学の性格理解について、菅野礼司監修、よみがえる理科教育、東京書籍株式会社、1999, 12-13.

- 12) 前掲書 2), p 94.
- 13) 坪井良子, 芳賀佐和子, 松田道子, 高橋陽子: ナイチンゲール看護学校と有志共立東京病院看護婦養成所の関連性について, 総合看護 1981年1号, 1981年, 36-46.
- 14) 土曜会歴史部会著: 日本現代看護の夜明け, 医学書院, 1973, 3-6.
- 15) 前掲書 13).
- 16) 坪井良子, 平尾真智子: わが国最初の看護教育と『ハンドブック・オブ・ナーシング』, 総合看護 1985年4号, 1985, 115-129.
- 17) 平野鑑: 看病の心得 (1896), 近代日本看護名著集成第4巻, 大空社, 1989, p 24.
- 18) ライダー島崎玲子, 大石杉乃編: 戦後日本の看護改革 封印を解かれたGHQ文書と証言による検証, 日本看護協会出版会, 2003, p 5.
- 19) 亀山美知子: 近代日本看護史 III宗教と看護, ドメス出版, 1985, 76-129.
- 20) 前掲書 19), p 41.
- 21) 前掲書 19), 37-51.
- 22) 前掲書 19), 55-60.
- 23) 大関和: 実地看護法 (1908), 近代日本看護名著集成第11巻, 大空社, 1989, p 24.
- 24) 前掲書 2), p 98.
- 25) 看護史研究会編: 看護学生のための日本看護史, 医学書院, 1989, p 94.
- 26) 亀山美知子: 近代日本看護史 II看護婦と医師, ドメス出版, 1985, 166-169.
- 27) 小山真理子編: 看護教育の原理と歴史, 医学書院, 2003, p 69.
- 28) 前掲書 29).
- 29) 前田アヤ: 聖路加看護大学 (1) 時は流れて (創立から昭和10年まで), 看護教育 6 (8), 1965, 53-58.
- 30) 前掲書 29).
- 31) 鶴沢陽子, 花島具子: 看護書からみた近代看護教育 明治10年“看護心得”から第2次世界大戦終了まで, 看護教育 23 (9), 1982, 544-553.
- 32) 西尾幾治: 看護婦教育の実際 (1939), 近代日本看護名著集成第17巻, 大空社, 1989, 23-126.
- 33) 亀山美知子: 近代日本看護史 I日本赤十字社と看護婦, ドメス出版, 1983, 11-35.
- 34) 前掲書 32) 145-149.
- 35) 山本捷子, 国分アイ, 内海節子, 村瀬千春: 戦前の日本赤十字病院における看護実践とその教育の実態, 日本赤十字看護大学紀要 No 7, 1993, 34-43.
- 36) 平成13年度~平成14年度厚生科学研究費補助金 医療技術評価総合研究事業報告書「基礎看護教育における看護技術および認知領域面の教育のありかたに関する研究」, 日本看護学教育学会誌, 13(2), 2003, 81-192.